かかし祭を生み育てて13年 今では奥富の風物詩 コミュニケーションも盛んです

人 HITO

塩野谷延夫さん
（奥富かかし祭実行委員長）

1990年に行われた「全国かかしサミット」では、参加した９市町村はいずれも、市長や観光協会の理事長が出席し、個人の出席者は塩野谷さんだけだったそうです。今では、自治会もバックアップしてくれるようになり、地域総出の手作りの祭りとなりました。
出品は奥富地区以外からもあるそうです。皆さんも来年は参加してみてはいかがですか。

狭山市で唯一田園風景の残る奥富地区。この季節に地区の皆さんが心待ちにしているのが奥富かかし祭です。今回は、恒例となったかかし祭の生みの親で、13回めの今年まで、実行委員長として祭りを盛り立ててこられた塩野谷延夫さんをご紹介します。

塩野谷さんがかかし祭を始めようと考えたのは、子供会の育成会会長をやっていたころです。「田んぼのある地域の特性を生かし、大人から子どもまでが楽しめて、地域内のコミュニティづくりも活発になるような手作りのお祭りはできないだろうか。」と思い、奥富の田園風景に調和するかかしに着目。育成会の有志を誘って始めたものです。最初は、お金も人手も無い中でのスタートでした。今でこそ有名なかかし祭ですが、ここまでになるには、参加のお願いに、地区内のあらゆる団体に出向き説明したり、賞品などの確保のために、企業や商店などへ協賛のお願いに歩き回るのが日課だったそうです。そして、実行委員一人一人が努力と苦労を重ねた結果、第1回で何と87点の作品が集まりました。

お金が無いのは今も変わらないそうです。しかし、皆さんの参加で本当に祭りは充実してきています。

「かかし祭は、ただ見るだけでなく、子どもから高齢者までコミュニケーションを図りながら参加できます。模擬店など何らかの形で多くの人が関わっているのが、奥富のかかし祭の特徴です。だから、こんなに長く続けてこれたのだと思う。また、当日まで皆さん秘密にしていて、何が出るか分からない、それが楽しみでもあるんです。何点出てくるかも分からない。結構ゆるやかにやっていますから。」と自らも西方囃子保存会の一員として、作品を製作しながらおっしゃる塩野谷さんです。

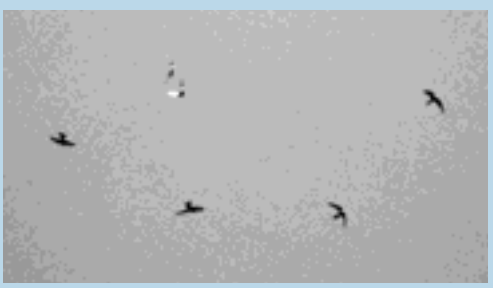
ファミリーでの出品も毎年あり、地域だけでなく家庭内のコミュニケーションにも確実に貢献して、これからも盛んになっていきそうです。

今年の人気は慎吾ママとオリンピック

狭山の生態系 67

ヒメアマツバメ
（アマツバメ目アマツバメ科）

全長約13㎝。翼長は約28㎝で体の大部分が光沢のある黒色、喉・腰の部分が白くなっています。元来は東南アジア・インド・アフリカなどの熱帯から亜熱帯に分布しており、日本にはいない鳥でしたが、１９６０年代に太平洋岸の各地で観察されるようになり、現在では茨城県にまで分布が広がり、今後さらに分布を拡大する傾向にあります。大部分の地域では留鳥で、コシアカツバメ・イワツバメなどの巣を乗っ取り、繁殖とねぐらの両方に利用します。市内では入間川河川敷の上空を数羽から十数羽前後で飛翔しているのを見ることができます。



撮影…県生態系保護協会狭山支部
矢内昭夫さん（水野）